

連載 4 エミール・ヤニングスに魅了された文人たち

宮沢賢治がドイツの名優エミール・ヤニングス（1884～1950）を「エミ・ヤン」と呼んで愛でていたということは、活動弁士さわとみどりの澤登翠師匠に教えていただいた。宮沢清六『兄のトランク』（ちくま文庫）によれば、「ルビッチやムルナウの監督した、エミール・ヤニングスのものを何篇か見たとみえまして、「エミ・ヤンはなかなかいいもんだよ。エミ・ヤンを一しょに見に行こう。」などと誘ったという。清六氏は、花巻の朝日座という映画館で、エミ・ヤンことエミール・ヤニングスの『肉体の道』を見たことを記憶している。

室生犀星は、エミール・ヤニングスについて、「[「面」と「技」とを同時に享有する] 稀有な俳優であり、『最後の人』『ヴァリエテ』『肉体の道』『タルチュフ』を「全映画界しやうりつに聳立する一大奇峰」（「エミール・ヤニングスの芸風」『中央公論』1928年1月号）だったと論じている。おもしろいのは、本人には迷惑かもしれないけれど、エミール・ヤニングスを思うたびに、なにかしら谷崎潤一郎氏を連想すると、このエッセイで述べていることだ。底しれない大きさや怪物性を感じさせるということのようである。

そのひきあいだされた谷崎潤一郎のほうは、『カリガリ博士』のヴェルナー・クラウスがイアーゴを演じ、エミール・ヤニングスがオセロを演じた『オセロ』（ブコウスキー監督、1922年）について言及している。（「芸談」『改造』1933年3月～4月）「イヤーゴママのクラウスがヤニングスのオセロをそそのか唆して、その肩へ手をかけながら、後ろ向きに立つ所」の背中そそのかの演技のすばらしさ。そして、真実が明らかになった後、オセロがデズデモーナとの姦通を疑われたキャシオーを抱き寄せるシークエンスについては、「讒言ざんげんによつて最愛の女を殺し、取り返しそそのかの付かないことをした後、彼女と関係があるやうに疑つてみた男を引き寄せて、死んだ女を愛撫するが如く彼を抱きしめるといふ感情はまことにさうあるべきところ」とまで述べている。どこがそうあるべきところなのか、ホモソーシャル（男同士の絆）の言説は谷崎にはあまり似つかわしくないようにもおもえるが、ここは谷崎にそこまでいわしめた、エミール・ヤニングスの身体性をほめたたえるべきなのだろう。エミール・ヤニングスとヴェルナー・クラ



ムルナウ監督『最後の人』ポスター



『オセロ』エミール・ヤニングスのオセロ（左）とヴェルナー・クラウスのイアーゴ（右）

ウスは、1920年代から30年代にかけての、ドイツ映画界を牽引する二大巨頭だった。

ドイツ文学者であり、衣笠貞之助監督のもとで撮影に参加したこともある武田忠哉ちゆうぎは、『キネマ旬報』1927年6月27日号「『ヴァリエテ』のエミール・ヤニングス」で、「彼はゲルマンの官能を一身に負つて巨人的に立つ肉体なのだ」と述べた。そして翌1928年1月1日号「エミール・ヤニングス」では、「ヤニングスはロダンだ、但し、彼は粘土を扱はしないで、影を用ひて強烈に仕事するのが相異点である」と論じている

このように辿ってくると、一癖も二癖もある文人たちが、エミール・ヤニングスに魅了されていたことに気付かされる。それはどういうことなのか。しばらく、彼の出演作のこと、監督したムルナウのことなどを、ここで考えてみたい。